

## 本年度大会は高知大学で開催

— 11月28～29日 —

1987年度社会経済史学会中国四国部会大会の当番校は高知大学が快諾されたことが、昨年12月岡山大学での会員総会で報告された。その後部会事務局が当番校と折衝した結果、本年11月28日(土)午後より29日(日)午前にかけて開催されることが最終的に決定した。

1972年、近畿、九州、関東の各部会につづいて本部会が再建されて以来、開催地はカバーする中国四国9県を既に一巡し、二巡目の半ばに至っている。この間、当番校関係者や事務局の尽力で会員数は増加の一途をたどり、現在百数十名を越えるに至っている。地理的制約から、年一回、各県

持ち回りで、という方式は他の地方部会と比べ、ユニークなものとして注目を集めている。

しかし、近年の部会大会を見るかぎり、報告者・出席者が主として開催地域内の会員に限定される傾向が現われている。大都市圏の研究者に比べ、日頃どうしても研究上の刺激が乏しくなりがちな我々の本部会にとって、広範な会員の参加と交流が求められている。事務局では別紙のように、7月末を締切日として報告者の受付を行っており、会員諸兄姉の積極的な応募ないし推薦を期待したい。

## 昨年度部会会計報告される

昨12月の会員総会において、1986年度部会会計報告が下表のように行なわれた。著しい特徴は「会費」納入率が3分の1にも達していないことである。事務局では、会員本人から退会の申し出がないかぎり、『会員名簿』からの抹消は行なっていない。他の地方部会でも、会費滞納が続くことがあっても、部会の発展を願う立場から、むやみに除名は行なっておらず、やむを得ない措置といえる。とはいえ、部会財

政が納入会員のボランティアに依存しているような現状は、けっして正常な姿とは言えないであろう。会費納入の促進が望まれよう。

「歳出」の方は、たとえば前号会報が、ワープロ打ち・コピーとも事務局の自前で作成されているように、徹底的な節約が計られている。「繰越金」はなお増額を計って、部会独自の「事業資金」としたい構想のようである。

[1986年度社会経済史学会中国四国部会会計] 1986.12.6 現在

歳 入		歳 出	
前期繰越金	221,704	印刷費	30,000
会 費	51,000	通信費	28,630
		会議費	3,000
		大会補助	20,000
		雑 費	1,600
		(小 計)	83,230
		次期繰越金	189,474
合 計	272,704	合 計	272,704

## 1986年度 大会報告

1986年度社会経済史学会中国四国部会大会は、12月6日、7日の両日にわたり岡山大学経済学部で開催され、9名の報告に対し40名が参加し、熱心な討議が行われた。以下、報告の順序に沿ってその報告内容と討議について、簡単に記します。

葛西大和氏（岡山大学）は「両大戦間期イギリスにおける産業立地の動向と地域経済の変化」と題し、1930年代に始まるイギリス政府の産業立地への干渉—たとえば特定法などによる—が英国の産業立地・地域経済の変化に対応したものであるとして、20年代・30年代の工業立地の動向を解明し、大ロンドン地域への著しい集積・集中がみられたこと、地域経済に関しては、北部地域と中・南部地域では、新旧産業の発達に著しい差異がみられたこと、などを明らかにした。これに対し司会者の竹内常善氏（広島大学）から「特定法」が地域変動に及ぼした影響について、高橋衛氏（広島大学）から工場の集中化の低下の原因と特定法との関係如何等の質問が出された。

谷美之氏（岡山大学研究生）は「船舶改善助成施設について—1930年代のわが国造船政策の転換—」と題し、昭和恐慌下の我国造船業界の不況対策であった船舶改善助成施設について、船舶改善協会の建議と成立した予算とのギャップ、第一次～第三次助成施設と第四次「海運国策」との質的差異を「不況対策」から「海外進出策」への転換という観点から明らかにし、海外進出策も海運における「自由主義」が強調された時期であるとした。本報告に対して、高橋衛氏から海運

国策についてはユニークな見解であるとの指摘が、有元正雄氏（広島大学）は、第一次大戦中の工場数の減少は独占保護政策であり、海運国策も国家の手厚い保護を受けたという限り「自由主義」とはいえないこと、大戦中での急成長とその後の惨憺たる姿をもっと解明すべきであることなどを、坂本忠次氏（岡山大学）は、大戦中における大蔵省預金部の貸付金の増加と国家の補助金との関係を考慮し、補助金自体の変化を把握する必要があると指摘された。

有元正雄氏は「戦間期農民運動の史分析—岡山県を中心に—」と題し、岡山県を中心とした戦間期の農民運動を3期に区分し、統計に表われた争議以外の争議を「小作争議の状況」と位置付け、特に第2期に広範に展開されたこと、岡山県農民運動で特筆すべき戦略・戦術として小作料永久3割減闘争と土地国有論を中核とする耕作権確立の明確化、小作組合運動に関しては、日農と小作組合との連携が随所にみられ、地主小作協調組合といえども地主の温情主義では解決しえないほど農民の実力が高まっていること、日農ばかりでなくこれら小作組合や協調組合も含めて「小作争議の状況」をつくりだしたこと、これら農民運動に対する官憲側の対応については、内務省＝警察権力と農省務省官僚との相違に着目し、小商品生産者化の進行と貧農脱農家・中農標準化傾向を背景として、日農の労農的革命のコース、農民的改革のコースが3・15事件を画期として分化し、農民的改革のコースも1933・34年を画期として国家独占資本主義的再編のコースに包括されていくとした。

この報告に対して、坂本忠次氏は土地国有論の依拠資料に関する質問と、地域区分論導入の必要性を、森元辰昭（清心

女子高校)は、地主の基本政策が土地所有維持にあるとする総括に対する疑問と、米穀検査以後の明治40年代の争議についての検討の必要性が、佐藤正志氏(徳島地方史研究会)からは小作協体制の具体的な事例の提示に関し、それぞれ質問がなされた。

在間宣久氏(岡山県史編纂室)は「明治後期一大正期における商品流通と各駅の動向—『岡山県統計書』の分析を通じて」と題し、明治後期から大正期にいた岡山県内主要駅で取り扱われた物産輸出入の検討を通じて、岡山駅を始めとする主要五駅への物産の集積・集中化と、県南諸地域における駅では紡績業・織物業等の展開に規定されたこれら関連物資の輸出入駅となっており、鉄道を中心とする近代交通体系が、この時期に再編成されたことを明らかにした。本報告に対しては竹内常善氏から依拠資料の性格について触れ、金額表示方式になっていることから、価格変動による補正の必要性を、司会者の道重哲男氏(島根大学)は、松方デフレ下の道路整備事業と鉄道路線とが位置的に平行しているか否か、各村レベルでの輸出入統計の検討が可能であるか否か、陰陽連絡による経済圏の変化の解明等の指摘が、森元辰昭は、本報告の位置づけに関し、岡山県における近代交通体系がこの時期に確立したと考えていいか否かの質問を行った。

佐藤雄一氏(岡山大学社会人コース)は「戦前期日本資本主義の展開における遊廓—岡山県の場合—」と題し、主に「岡山県統計書」の分析を通して、岡山県における遊廓の歴史を、免許地・貸座敷業者数・娼妓数・遊客数および同消費額・娼妓の衛生事情等の推移から分析し、戦前期日本資本主義の形成と展開過程の諸矛盾が最も集約された制度としての公

娼制度実態を詳細に明らかにした。これに対し、太田健一氏(岡山県立東商業高校)は、水揚げの分配率・契約条項について、有元正雄氏は、娼妓の手取りに食費等が入っているか否かの点と、データ作成上の問題として、実質地価の変動・賃賃価格制などの指摘がなされた。

大会2日目は杉森晃一氏(岡山大学)の報告から始まった。氏は労働力人口の分類体系に関する通説—資本制国家では地位分類や階層分類は発達しない—に対して、地位分類や階層分類がはやくから発達しているフランスの事例からこれを批判し、社会は階級を軸として動くが、階級相互の対立・連合の事実を踏まえ、階級分類は数多くの職業分類・地位分類等を組み合わせて計数化すべきであるとした。この報告に対しては、高橋衛氏から、「資本論」第3巻で展開された古典的階級概念との関係如何、本報告での階級分類は古典的「階層」分類になるのではないかとの質問が、神立春樹氏(岡山大学)からは、分類基準が社会一般に使用されているものを利用するという方法であるのか否か、さらに司会の松本俊郎氏(岡山大学)からフランスの職業分類と日本の国勢調査と比較すると、どの部分が詳しい分類項目となっているか、などの質問が出された。

尾野比佐夫氏(鳴門教育大学)は「15世紀後半の英国における政権交代の財政的要因」と題し、イギリス絶対王政成立期におけるランカスター朝ヘンリー6世とヨーク朝リチャード3世の政権崩壊の要因が、両政権における財政政策の破綻にあるとし、前者においてはカレー・ステープル組合、後者では献金政策に対するナイト=ジェントリー層の反乱にその主な原因があるとした。これに対し、黒川勝利氏(岡山大学)からカレー・ステ

ープル組合の活動とその性格についての質問がなされた。

尾川弘氏（広島大学大学院）は「幕末維新时期における長州藩の農業雇用労働」と題し、幕末・維新时期における農業雇用労働の実態を、山口県岐波村の地主＝部坂家の年季奉公人・日割奉公人の存在形態の分析から報告した。これに対し、辻岡正己氏（広島経済大学）から研究史の整理についての指摘、神立春樹氏は、本報告の意図が芝原拓自氏の提起した生産者「農民」的性格を位置づけようとしているのか否か、さらに部坂家は手作り地と小作地とのいずれに重点をおいた農業経営であったかの質問が、岡俊二氏（四国学院大学）は日割奉公人の1ヵ月労働日数に触れ、部坂家以外にも雇用されているとすれば近代的賃労働の萌芽と考えられるとの指摘がなされた。

最後に、定兼学氏（岡山県史編纂室）は「近世期における農村変貌と漁業問題」と題し、岡山藩における新田開発・塩田開発と漁業補償問題、および海草肥料をめぐる農村と漁村との関係を事例として、近世封建制度下の漁村対農村の対抗関係について報告した。これに対し、上原兼善氏（岡山大学）が、漁民の漁場利用に関し、近海利用だけでなく、豊後水道から紀伊水道におよぶ瀬戸内一帯への進出とその場合の漁場入会関係の解明が必要であるとの指摘があった。

以上、駆け足で当日の報告と質疑について述べてきたが、最後に、有元正雄氏の報告に限って筆者なりの感想を述べておきたい。岡山県農民運動に関する意欲的な報告で、多くの示唆を得たことを確認した上で、筆者の疑問とするところは、第1に、戦間期に於ける地主経営の特徴についてである。氏は、この期の特徴を土地所有の維持にあるとされるが、既に

多くの指摘がある通り、この期の県南大地主経営は土地収入よりも有価証券収入の方が上回っており、地主経営は土地から有価証券投資に移行していると考えられる。そして、第1期の小作争議がこれら大地主を相手とした争議であったことから考えれば、まず、大地主と中小地主との経営の差異を考慮する必要があると思われる。第2に、「小作争議の状況」という観点は極めて重要であり基本的に賛成であるが、この状況が生まれる背景には不在地主と在村地主との相違があると思われることである。例えば、赤磐吉井町の場合、不在大地主服部家と在村地主2名を相手とした争議が起こるが、在村地主は比較的早く農民の要求を認めているのに対し、西服部家は強硬な手段を駆使しているため、大争議となったし、また、このような地主間の分裂が争議の要因を作り出すことになっていること、日農による組合加入の勧誘もあるがこれに加わらず、戦時体制下でも執ように争議を繰り返し、小作料減免を実現しているのである。第3に、坂本氏の指摘の通り、やはり岡山県全体を一括してこの期の争議を取り扱うには若干の無理が生じると言うべきであろう。地帯構造的な差異を考慮せざるを得ないと思われる。とより、第1期に共通的な要因が生まれ、特に2期にはいると岡山県を一括して語る事が出来る共通の背景「昭和恐慌」があって、地帯構造的な特徴は薄くなると考えられる。

ともあれ、岡山県農民運動の研究に関しては、栗原百寿氏の研究以外では個別事例分析は見られるものの、体系的な研究は、さほど進展していない状況の中で、その克服をめざした本報告は岡山県農民運動の研究に多くの寄与を成すものであると確信する。

なお、大会一日目の夜、岡山大学文法  
経小会議室で懇親会がもたれ、岡山大学  
共済会のおばさんたちのお世話になった  
「オデン」をつつきながら、松本俊郎氏  
の司会で、近況報告を兼ねた自己紹介が  
行われ、楽しく有意義な時間を過ごすこ  
とが出来た。特に付記しておきます。

(清心女子高校 森元辰昭)

## はじめて 社会経済史学会 に出席して

わたくしは、二枚の鑑札をぶら下げて生  
活している。一つは、被服縫製業という  
名の仕事であり、二つは、岡山大学経済  
学部第Ⅱ部三年次編入学生（通称、社会  
人再教育とか社会人コースなどといわれ  
ているもの）であるところの勉強だ。ひ  
らたくいえば、昼は金儲け、夜は道楽（  
ばぁ～さんや娘の説）という日々。これ  
は感心したことでない。何でも出来るス  
ーパーマン型ではないわたくしは、一つ  
のことに集中しなくてはロクな結果しか  
出ない。特に、近ごろの産業経済的な世  
の中の変わり様に、マイナスの位置へ追  
いやられている繊維産業界の落込みへ巻  
き込まれ、頭の痛い思いをしておる。お  
勉強の方は、残り2単位だけを防波堤と  
してトコロテン卒業に抵抗し、おもしろ  
く成ってきた図書館通いを続け、栄誉あ  
る留年も三年目が来る。

そんな、どっちゃつかずの暮らしに、招  
待状が届く。神立先生からだ。押っ取り  
刀で駆け出す。昭和61年12月6～7  
日、岡山大学へ。『社会経済史学会中国  
四国部会、1986（昭和61）年度大会』と  
いう次第。久し振りで勉強の雰囲気への  
めり込んでしまう。命の洗濯である。だ  
いたい、大学へ出掛けるということは、

例えようもなくいやらしいと言うか、ど  
うしようもなくひどい所からの、逃避が、  
わたくしの場合にはある。大学はなまぐ  
さい現実社会とは別の仙人境なのだ。両  
日に亘った学会の中身は濃く、不勉強を  
心地よく打のめされ、あつという間に幕  
となった感じ。お天気は極上、空気は綺  
麗。すっかり、いい気分になった帰り道、  
神立先生からお声が懸かる。『学会参加  
のレボを提出するように』であった。学  
生にとって、先生から言葉を懸けられる  
くらい嬉しいことはない。しかし、事に  
よりけりだ。先生のご商売が、『学生に  
レボを書かせること』であることは承知  
していても、それならそれらしく事前に  
漏らして貰えなかったかと思う。ここは  
ええ！そこはおえん！根性にいった！、  
ようわからん！などなど、メモの取りよ  
うが有ったものを。と、ひそかに恨んで  
はみたが後の祭り。『速いほうが宜しい』  
と容赦なく期限なしの敵命が追い打ちを  
掛ける。歌の文句じゃないけれど、仙人  
境での先生は神様である。

☆☆☆☆☆☆☆☆

学会での持ち時間は45分であった。ほ  
とんどが発表に使われ質問・討議は5分  
間くらい。勿体ないと思う。発表を10～  
15分間として討議を30分間と逆に配分す  
ればと考えた。慣れた参加者は直前に配  
られたレジュメを、発表を聞きながら読  
み取ることは負担にならないらしい。だ  
が初心者、特にわたくしのような浅学者  
は、膨大な資料に目を通すのがやらやっ  
と。こういう状況が続けば、学会に限ら  
ず会合というものは閉鎖的に特化されて  
しまうのではないかと案じた。会議中も  
刻々と変化する営業や業務の討議とは異  
なり、研究の発表であるから、なんとか  
改善の方法がありそうに思える。ネック  
は、当日配り物をするのであろう。事

務局に不必要な負担を負わずだけである。

資料は、2カ月前に、事務局というか世話人へ届けることだ。これを直ちに会員や招待者とか関係者に配る。そして、1カ月以内に質問書をおつめる。集まった質問を整理して再び配り返す。肝心なことは、飛び入りとか思い付きの当日質問は、これを認めず、次回扱いとすることである。当日は配られた質問、つまり全員が予め承知していることに就いて、討議するのである。この方法を実際に執行するとなれば、さまざまに問題はしょうじるであろうし、失敗もあろう。しかし、それは恐れることではない。第一、金はかからない。第二、時間の組替えと会員の自覚に変化があるだけで納まると考える。総会でのご発言に《会の活性化》というのがあった。活性化とは、研究の内容もあるかも知れないが、発表の方法も含めて良いのではないか。要は、メリットへのシフトである。

発表の時間は短くなるが、時間を高層化することだ。助っ人を認め、オーバーヘッドやスライドなどの活用を積極的に取り入れてはどうだろう。当然、数表のグラフ化が研究されるなど、理解への説得力も学会全体に備わるのではなかろうか。特に、外国の話には、地図とか年譜とか映像など数値や言葉以外のメディアが欲しい。近ごろ、文字離れがとやかく叫ばれるけれど、マンガばかりではない事に留意し、文字万能の限界が見えていると考えたい。ともあれ、器具機材は大学にあるとしても、資料作りに、多少おカネがかかる。しかし、模型とかパノラマとか実物展示などからみれば問題とはならない額であり、学会全体の活性化と向上の為、ここら辺りまでは踏ん張って見たいものだ。

ところで、些か身びいきの感を免れな

いが、同窓、佐藤雄一学兄の『戦前期日本資本主義の展開における遊廊—岡山県の場合—』（第5報告）は出色であった、と思う。かつての、学内研修会（昭和61年4月18日）での中間発表と比べ、半年という時の刻みの重厚さを、しみじみと思ひ知らされ、精進と怠惰の差をわたくしに教えてくれたのである。

出色と考えたのは、お互いに遷厝を迎えた域にある点と、拘束される肩書がない点から生まれたと感じるからである。このテーマは、若いとか、偉いとか、おおよそ望むべくもない無縁のなかからい挙げられた宝石なのだ。そして、どうしようもなく痛ましくも弱い《遊女》に焦点を絞り込む学兄の心根に、限らない《人間》を学ぶ。

岡山県を代表する民謡が、『下津井節』であると知っている人は少ない。裏日本や東北地方とは違い、岡山は民謡が少なく育たない地域性があることを、ありがたいと感謝すべきであろうが、『下津井節』に限っていえば、日常の愛唱歌とはならないであろうと聞いたことがある。地元、郷土史家としては第一人者の酒の席での話だが、民謡にはつきものの《ハヤシことば》に問題があるという。“下津井女郎衆はヨ、錨か綱かヨ、今朝も船を二そう泊めたヨ”という歌詞につけて、《ハヤシことば》が、“トコハイ、サノエ、トノエ、ソレソレ”となる。トコハイ、サノエは男女混声であり、トノエは女性の声、ソレソレは男性の声、であることが正調だそうだ。そして、郷土史家の蘊蓄を傾けての地方言語学によれば、女性と男性のそれぞれの《ハヤシことば》は、男女の営みのクライマックスの際、感極まって発する言葉、じゃない言葉、でもない叫び、ン！、なんと言えばよいのか、つまり、それそのものであ

るという。気がつかなかったのは、わたしくらいなもので、これは大衆的な常識だそうだ。『下津井節』は哀歌だという。

そこには、好むと好まざるとを無視する側が、無視される側を、民謡にまで託して全体的に社会的にだまし(ＴＶのコマーシャルとおんなじ調子で)、巻き込んだ非情さがある。この、どうしようもない重圧のなかでうごめく《遊女》たちの無念さを、民謡や、解釈に依っては多様化する地方言語といった抽象としてではなく、冷たく無味乾燥な数値で、しかし、動かしがたい真実として、克明に追い求めようとする佐藤学兄の研鑽に、単なる覗きや興味ではない学問としての真摯さを感じ、ただただ、うなり声を殺して敬服するだけであった。報告終了後の質問もこの点にかかっていたようである。

☆☆☆☆☆☆☆☆

学会という言葉は神聖なセレモニーのレポートを、日記や手紙を綴るようみ、本音丸出しのボロ糞には書けない。かと言って、商用文紛いに、歯が浮くようなお座なり調では、レントゲンのようにわたくしを見透かしていらっしゃる神様に通用するわけが無い。ここはどうしても、もう一枚の鑑札に染み込んでいる算盤越しの発想でいくしかなさそうだ。要は、レボを提出してしまうことである。その後がどうなるかの心配はすまい。もう一枚のお勉強の方の鑑札は、久しく店晒しのままだが、なんとかせんとおえんな〜と考える。いや、学会に出席したばかりに、考えるように仕向けられたというべきであろうか。

(岡山大学経済学部社会人コース  
渡 辺 広 安 )

## 部会大会

### 開催校一覧

今年度の部会大会は、1972年に広島大学において第1回大会を開催していらはやくも16回目を迎える。中国地区と四国地区が交互に当番校を受け持つことを原則に運営されているが、四国地区の大学数が少ないため、適当に中国地区で2年連続開催されることもある。1982年の松山商科大学大会より二巡目に入っているが、一巡目の順序通りに開催されるとは限らない。諸大学の事情を考慮しながら事務局が折衝にあたり、役員会で決定されている。今後の参考のため、以下、これまでの開催校を示しておこう。

(年度)	(開催校)
1972	広島大学
1973	松山商科大学
1974	山口大学
1975	香川大学
1976	岡山大学
1977	高知大学
1978	広島経済大学
1979	徳島大学
1980	鳥取大学
1981	島根大学
1982	松山商科大学
1983	広島大学
1984	山口大学
1985	香川大学
1986	岡山大学
1987	高知大学

## 高知大学人文学部

今年度の社会経済史学会中国四国部会は高知大学にて11月28日(土)、29日(日)の両日にかけて開かれることとなりました。以下、簡単に当番校の紹介をさせていただきます。

高知大学は人文学部、教育学部、理学部、農学部の4学部、入学定員計860名余よりなる中規模大学ですが、「自由」と「自治」の伝統を誇る独特の雰囲気をもつ学舎として知られています。学歌にも「あらたよの自由を求め、いざ起て若き力、雄々しく共に」とあり、「己が在所のかやぶき屋根も、かわらないのが自主の権」とか「7年血潮を流せしも、これもたれゆえ自由ゆえ」といった自由民権期の『よしや節』の気概を伝えて雄々しいものがあります。

人文学部経済学科は1949年文理学部社会科学科として出発し、68年経済学科に改組され、77年には文理学部の分離改組にともない人文学部経済学科となっております。現在は経済学関係のみならず、経営学、会計学、法学、政治学、社会学を含む28名の専任教官を擁し、地域経済資料室では白書、統計資料のほか地域社会・産業経済の諸資料の収集がなされ、他大学他学

部の教官、学生にも活用されることとなっています。

教育面では3、4回生に専門演習を課すだけでなく、1回生のための「社会科学演習」を設け、立志社時代の小結社活動に劣らぬ小人数教育と緻密な人格的接触が意図されています。「僻遠の地に似ず、知識的教科は大いに進んでいる」と明治15年に書き送った文部書記官伊沢修二の印象そのままに、大学教育が地域の独特の個性を伝える重要な柱となっている点は注目されます。

今年はその高知県代表が『三大事件建白書』を元老院に提出して百年目の年にあたります。高知大学では部会開催の一週間前に自由民権期のシンポジウムを開くべく準備を進めております。時間のとれます会員の方々には、ぜひそちらのシンポジウムにもご参加下さいますようお願い申し上げます。

高知市内、周辺部は観光地にも恵まれておりますが、村おこし運動や和紙などの伝統産業のフィールド調査の対象としても興味深いものが沢山ある地域です。

(文責：広島大学 竹内常善)

### 編集後記

これまで部会事務を一手に引き受けていただいていた広島大学に若干の支障が生じて、会報編集事務だけでもとりあえず1、2年、ということでお手伝いすることになりました。とはいいませても、中心記事は岡山大学関係者がとりまとめ、寄稿して下さいました昨年度部会大会の報告であり、当方は残った紙面のアナウンスを適当に行なった

にすぎません。ご高配下さった神立春樹氏に厚く御礼申し上げます。

他の地方部会は独自の会報をもっておりません。それだけ本部会の地域的特殊性が現われていると考えます。会員の相互交流をより進展させるために本会報がいかにあるべきか、皆様の声をよせていただけますようお願いしています。(岩)